

## \* 特別講演 IV

Modern methods of  
aphasia therapy

——ペック教授を迎えて——

弘前大学医学部神経精神科教授 佐藤時治郎 (司 会) —写真—  
講師 渡辺 俊三

1981年京都で行なわれた第12回世界神経学会のシンポジウムのテーマは『左右大脳半球に関して』であった。それと国際てんかん学会との合同シンポジウムは『大脳半球間関係とてんかん発作』についてであった。さらに、1981年のノーベル医学・生理学賞の受賞者が神経心理学者の R. W. スペリー博士 (米) であったことは、大脳病理学 (神経心理学) の黎明期を思わせるものがある。

この時機に本学会に特別講演者として Benton (米), Poeck (独) 両教授らを迎え、またシンポジウムとして『言語障害とその治療』が組まれたことはまことに時宜を得た企画といえる。

ここでは Poeck 教授のプロフィールに触れながら、講演の要旨を述べてみたい。Klaus Poeck 教授はドイツ・フライブルグ大学を卒業した後、1954年よりハイデルベルグ大学・デュッセルドルフ大学・ピサ大学 (イタリア), 次いでベルリン大学・フライブルク大学の助手・助教授として研究・診療に従事し、1967年10月アーヘン大学の医学部神経学教授として着任、現在まで講座を主宰している。

その研究は数多く、とくに教室独自の失語症バッテリー・AAT (der Aachen Aphasia Test) の研究 (Nerven Arzt 1980-1981) はその症例の豊富さと、統計学的手法を十分駆使した内容は高く評価されており、失語症の分類そのものも独自のものを持っている。そのほか Token-Test の系統的 研究、身体認知 (健常者と盲者) の研究、離断脳の研究などがあり、言語治療にも高い関心を寄せている。

ドイツ神経心理学では、Bay, Leischner 教授と並び立つ巨峰であり、その語学力はとくにすばらしく、独・英・仏語を自在にあやつって世界各国の学会での活躍は目覚ましいものがある。

また、日本との学問的關係も深く、今度の来日は初めてではなく、これまで日本の諸都市で講演されている。今回も、弘前・金沢・京都・東京で講演される予定である。また、日本の研究者にも広く門戸を開き、浜中淑彦 (京都大), 波多野和夫 (大阪赤十字病院), 北條敬 (弘前大) らの諸氏がその指導を受けている。

今回の脳卒中学会での Poeck 教授の特別講演のテーマは『最新の言語治療について』である。以下にその内容について簡述する。

昔から失語症は神経心理学の最大関心事であった。脳血管障害の85%が頸動脈系の障害であり、左右の発症頻度はほぼ同じである。左大脳半球が障害されると

その多くは失語症を呈し、言語治療を必要とするものがほとんどである。

言語治療は直感に頼るべきではなく、豊富な言語障害例の詳細な分析の結果をわきまえて実施されるべきものである。言語障害の要因を分析することによって、言語障害に対する特別のプログラムを組むことができる。それを実際の症例に当てはめて少しずつ変更していくこと

が大切である。このプログラムは患者がある言語部分を処理する場合の助けとはならないが、患者が実際の場面でことば・文章・談話をどのように作っていくかを教えることに役立つ。

Wiegel-Crump にも言語治療について報告しているが、われわれも言語学的研究にもとづく治療についていくつか研究をしている。

われわれの考えでは下記の段階的改善が得られれば失語症の治療は成功したと考える。

- イ) 言語の反復
- ロ) 汎化現象
- ハ) 汎化現象の持続

ここで、いくつかの言語治療の実際をビデオ・テープでもって紹介する。

- イ) Token Test での失語症患者
- ロ) 旋律的抑揚療法 (Melodic Intonation Therapy) の治療
- ハ) 同一言語の律動的な発語訓練
- ニ) 音韻・単語・語義・文などの障害への特殊治療
- ホ) 文章変換練習
- ヘ) 書字言語での治療
- ト) 動詞の変換練習
- チ) 役割演技療法 (role playing) (精神的なものとは違い、情緒的でなく、認知面を重視する。)

以上、Klaus Poeck 教授の経歴、講演内容をごく簡略に述べたが、これによって日本の脳卒中治療施設における言語治療がより発展することを期待するものである。